

【第 21 回パラグアイ便り】



2016年日本人移住80周年記念イベント

『パラグアイの若者を引きつける日本マンガ文化事情』

今年には日本人移住 80 周年。当地の主要メディアからみたパラグアイにおける日系人や日本文化の存在感について、これまでの【パラグアイ便り】で幾度か報告してきました。、当地有力新聞の特集号を通じて彼らの見方を紹介したもので、【第 11 回】では移住者の切り口で、【第 14 回】では食文化の切り口で、【第 17 回】ではスポーツ（相撲）の切り口で、それぞれ捉えた日本文化論ともいえる物語になっています。

今回の【パラグアイ便り】では、パラグアイで急速に普及しているマンガ文化について紹介しましょう。

当国での芸術文化活動ですが、交響楽団、オペラ劇団、バレエ団、演劇グループなど多く存在し、とくに秋の始まる 4 月からはアスンシオン市内の各劇場でさまざまな演奏会や公演会が開催されます。こうした伝統的な芸術分野での活動ですが、筆者の赴任前予想を裏切って (!) 実に活発で、とくにここ数年の当国の着実な経済成長を背景に少しずつとはいえ確実に充実し、市民生活の中に徐々に定着していくのが実感できます。



(写真：アニメ・フェスティバルの若者達。下は本使夫妻による茶道実演の様子と大使館ブース)

こうした芸術活動の中で近年異彩を放っているのが日本発のマンガ・コスプレ文化です。アスンシオンでは 2~3 ヶ月ごとにマンガ・アニメ大会が大型の施設を利用して開催されますが、ちょっとした祭典顔負けの大賑わいぶり。会場ゲートには入場料を払う若者の長蛇の列ができ、屋外広場ではゲーム遊びや模擬店、



(写真：屋内会場の賑わいと、書道・盆栽コーナー)

屋外では各種展示、コスプレグループの思い思いのパフォーマンス、アニメ・ソング歌謡ショーなどで賑わい、広大な施設が若者で溢れる光景になります。パラグアイではまだ先進国のような遊園地やテーマパークなど若者の娯楽施設がないためか、期間中は数万人にも達する若い参加者の熱気で大盛況です。

これを主催しているのはマンガ・コスプレ文化の愛好家グループで、いくつかの団体が適宜協力して年に数回大フェスティバルが実施されますが、当館でもこうした若者グループからの要請に応じて大使館ブースや、また日本文化紹介事業として書道や盆栽さらには武道実演コーナーを設置し、さらに筆者夫妻が茶の湯の実演でお点前を披露するなどして、この若者達の祭典を応援してい

ます。

今世界的にマンガ・ブームと言われていますが、当国若者たちの心を熱烈に引き付けていることは実際の活動に参加してよく分かります。

こうしたパラグアイ発のマンガ文化について、当国の主要紙“Ultima Hora”紙の別冊付録“VIDa”が、《Manga guarani》と題する特集記事を掲載しました。なお「グアラニ」とはパラグアイ国民のアイデンティティーを形成する土着文化を意味します。



(写真：“VIDa”特集号の表紙。)

英雄廟の前に並ぶ当国マンガのキャラたち)

その記事の内容ですが、冒頭、『今パラグアイでは、日本のマンガやアニメに夢中なる人口が増え、さらにそれを学ぼうとする若者が増大している。今や、パラグアイ・タッチの独自のマンガ文化を創ろうとしており、規模の小さいパラグアイの枠を超えた世界の市場を目指している。』として、西欧コミックとは異質な独特のキャラクターや



(写真：野点て茶会の風景)

ストーリーを持つ日本発“Manga”がパラグアイの若者を引きつけてきた経緯、さらに彼らが画法を学び、プロのマンガ作家として徐々に活動を広げていくさまを伝えていきます。



(写真：マンガ狂と題する“VIDa”記事本文。)

左のキャラはグアラニの神話を題材とする主人公「クルピ」)

記事ではまず、日本のマンガは、古くは白黒テレビ時代から鉄腕アトム、鉄人 28 号などを通じて欧米の子供達に親しまれていたが、一方、日本発“Manga”のジャンルで西洋社会でその存在感を確立した歴史的的作品が、日本で 1984 年に出版されベストセラーになった大友克洋の“Akira”だった、とします。

次にパラグアイ事情ですが、最初に当国が日本のマンガに接したのは、近隣国で放映された実写版のウルトラマン。その後、70 年代初頭にアルゼンチンのコミック誌《ピリケン》でウルトラマンが出版されるに及んでパラグアイで幅広く知られるようになりますが、この第一世代の読者には欧米のコミックと日本の“Manga”との違いは認識されていなかったようです。

パラグアイで日本文化としての“Manga”が圧倒的な人気を博し、その後の根強い愛好家を誕生させたのはドラゴンボール・シリーズの到来によるもので、これに刺激されて 2007 年からマンガ・コスプレ・アニメ愛好家団体《Mack》を中心として大規模な芸術活動が始まります。なおこの《Mack》の名前も、M（マンガ）、A（アニメ）、C（コスプレ）、K（カラオケ）の頭文字を取ったもので、日本発のポップ・カルチャーへの傾倒ぶりが窺えます。



(写真：Mack のコスプレ・グループ)

記事では、マンガやアニメの熱狂的愛好家“otaku”の集いとして常に大盛況となる各種のイベントやフェスティバルを通じて若者の意識が高まり、マンガ分野で美術的才能を磨き質を高めていこうとするアーティストやマンガ作者の誕生を促したと述べています。

この《Mack》フェスティバル開催に先立つ 2005 年に、マンガを指導する教室『アート・スタジアム』が誕生しました。2015 年には当国教育省が、西欧コミックと東洋マンガ両者についての 3 年間のコースを正規の教育課程として承認しましたが、これはメディア領域で唯一公的承認を受けた科目です。



(写真：若手のマンガ家と彼らが出版刊行しているマンガ雑誌“Mugen”。日本のマンガ本にならって右綴じとなっている。)

記事で紹介されているのはアート・スタジアムを修了した若手マンガ家たち。子供の頃からのマンガ好き、ドラゴンボールに夢中になって自分でキャラクターの絵を描き始め、マンガ教室で巡り会った同志が集まって各人の才能を活かした本作りへの情熱が生まれます。

こうして 13 人の同志が集まって 2010 年にコミック雑誌“Mugen”の刊行を開始、その後年一回のペースで出版されています。

制作、装丁、発行まですべてパラグアイ国内で完結。その作画技法、視覚的に訴える言語表現などを学び取り、装丁も日本のマンガ本と同様の右綴じにする、といった凝りよう。物語性も日本のマンガに習いながら題材はパラグアイ的なもの、例えばグアラニ神話などを取り入れるなど、新しい領域を目指しています。もちろん一冊 500 円の販売ではコストは賄えず費用は彼らの持ち出しですが、ネット配信など市場開拓の道を模索しています。

この記事は最後に、『パラグアイのマンガの将来は拓かれている。マンガ作家は増え続け、また同時にマンガ教室もアート・スタジアムを皮切りに続々誕生している。若者達は無限に広がる創造の地平に向かって突き進んでいる。』と結んでいます。



(写真：会場でのスナップ)

パラグアイは地下資源や観光資源もなく、資源に恵まれた大陸である南米諸国の中でも異質で、それ故に長く存在感の薄い国でした。近年になって経済・政治・社会の各分野で変革への胎動が感じられますが、この国での貴重な資産は、転変きわまりない地下資源ではなく、むしろ豊富で世界を知り学ぼうとする豊富な若年層です。今回

はマンガ・コスプレという軽チャー分野での話でしたが、こうした若者のあくなき好奇心や探求力が新たな国作りを先導してくれることを期待しています。

(2016年4月 上田善久 大使館)